

幼稚園3歳児における人間関係の広がり

—保育者との信頼関係を築くにあたって—

林 美代・白井 絵里・平尾 美香・廣瀬 三枝子

1. 研究の所在と目的

子どもが人との関わりを持つ最初の場所は家庭である。誕生をきっかけに、母子関係を中心として父親やきょうだい、祖父母などの家族との相互関係が出来る。さらに、家族との関係をもとに近隣の子どもたちとの関わりを持つようになる。

幼稚園や保育所、こども園は、子どもが初めて家庭の基盤を離れ集団生活を経験する場所である。この経験により、子どもの人間関係は家族を中心とするタテの关系到同世代の友達とのヨコの関係が加わり、大きく拡大していくことになる。しかし、最近では核家族化や少子化の進行、近隣の子ども集団の消失によって、人との関わりをあまり経験しないまま入園してくる子どもも少なくなく、今日の子どもたちにとって幼稚園・保育所・こども園への入園の意義は大きいとされる¹⁾。

幼稚園においては、3歳児の子どもたちには幼稚園が初めての集団生活となることが多い。そのような子どもたちが今までの家庭環境と違った幼稚園という環境にどのように慣れていくのかということは、一人ひとり違っており個人差が見られる。そのため、子ども一人ひとりを受け止め、それぞれのペースを大切にすることが保育の基本とされる²⁾。教師が子どもの一人ひとりのあるがままの姿を受け止め、見守り、支えることによって信頼関係が育まれていく。教師との信頼関係が築かれると、

友達への興味・関心も広がり、新たな関係が築かれていく。さらに、友達との関係の中で子どもは自分を出すようになり、自己表現することで他児とのぶつかり合いを経験し、相手の存在や自分との思いや考えの違いに気づいていく³⁾。そのような経験の中で、嬉しい、楽しい、悔しい、楽しい、怒りなどの感情の体験も出来るのである。これらを通して自己の気持ちを出したり抑制したりしながら、自分の感情をコントロールしたり、相手の気持ちを推測して思いやったり、互いに尊重したりする力を育てていく。

さらに、『幼稚園教育要領』において、幼稚園の在り方として「教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の幼児が、将来、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる⁴⁾」とあり、家庭や地域とは異なる教育の在り方を具体化する必要がある。そのためには、「幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」、「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること」、「一人一人の特性に応じた指導が行われるようにすること」の3点が挙げられており⁵⁾、「教師との信頼関係に支えられた生活⁶⁾」や「友達と十分に関わって展開する生活⁷⁾」などが重視されている。

しかし、核家族化、少子高齢化、情報化、都市化などで語られるように時代の変化に伴い、子どもを取り巻く環境は変わってきた。その中で人間関係の希薄化が指摘され、幼稚園においても他児と望ましい関係を築くことが出来ない子どもが増える傾向に

令和2年1月6日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8049 FAX 0877(49)5252
Email hayashi@kjc.ac.jp

ある⁸⁾と言われるようになった。入園当初の子どもたちの様子を見てみると、保護者から離れて不安を感じる子ども、同年齢や異年齢の友達との関わりで自分の思い通りにならず戸惑いを感じてトラブルを起こす子ども、どのようにして人とかかわってよいのか分からない子どもなど様々である⁹⁾ため、教師は一人ひとりの違いを受け止めて支援することが求められる。

そこで、幼稚園年少組（3歳児）の子どもたちに焦点を当て、入園当初の様子から進級を控えた年度末までの様子を観察し、子どもの人間関係がどのように育つのか、またそのために教師はどのようなかわりや援助を行う必要があるのかについて考察する。

2. 研究の方法

（1）研究の対象

香川短期大学附属幼稚園3歳児、担任教師及び活動に関わる園の教職員

（2）研究の方法

日々の保育の中での子どもたちの様子を、担任教師が実践指導する中で観察した記録に基づいて、子どもの人間関係の育ちに教師がどのように関わっているのかについて考察する。

（3）観察期間と観察場面

2018年4月～2019年3月まで

観察場面は、一日の幼稚園生活の中で、担任教師が印象に残った場面

3. 結果と考察

（1）幼稚園に慣れるまで

【事例①：アンパンマン描いたよ】

入園式翌日、初めての幼稚園生活を迎える。涙を見せる子、興味のあるおもちゃを見つけてどんどん遊びこんでいく子、途中でさみしくなって涙が出る子など、それぞれだった。A子は、朝の集まりでは涙ながらに返事をする。次

第にいろいろなところでも涙が出てくる。積み木遊びをしているとき、友達が触れて壊れてしまうとそこでも涙が出る。

初めはいろいろな遊びに誘っても「ううん」と首を横に振っていたが、次第に頷くようになる。5日ほど経過すると、お絵描きをしたり絵本を読んだりした翌日には、A子から「お絵描きしたい」「これ読んで」と少しずつ思いを伝えてくるようになる。大好きなお絵描きの後には、「アンパンマン描いたよ」と笑顔で教えてくれる。

5月になると、大好きな母親と別れる時はまだ涙を見せることがあるが、「バイバイ」と手を振ることが出来るようになる。それでも母親が見えなくなると寂しい気持ちになることも多い。しかし昼になると遊びに向かう気持ちが生まれ、表情も明るくなる日が出てきた。わっかを通してネックレスを作った時は、「お母さんに見せる」と集中して取り組む姿が見られる。

入園当初、A子は母親と離れる園生活にかなり不安を感じているようだった。そのため、教師はありのままの姿を大切に、A子が自分から遊びたくなったその時々のお気持ちに寄り添い、「園生活が楽しいな」と思えるように関わることを心がけている。A子の気持ちに共感し、好きな遊びを見つけて遊ぶ楽しさを感じていけるように関わっている。教師が子どもの興味を理解し、関心を寄せ、寄り添ってくれることで少しずつ教師との距離が近づいてきていることが感じられる。5日ほど経過すると、A子のほうから思いを伝えようする姿も見られるようになっており、教師との信頼関係を構築することの重要性が分かる。

また教師は、母親との関係も大切に考えて関わろうとしている。母親と離れる時は、A子と母親の時間を大切に、やり取りを見て焦らず預かるタイミングをその時々のお気持ちの動きによって見計らいながら受け入れをしようとしていた。そのため、A子の気持ちが「幼稚園は嫌、お母さんと離れたくない」から、一時的ではあるが母親から離れて幼稚園で活動ができるようになってきている。そのことは、母親も感じているようであった。初めての集団生活は子どもにとって不安が多い。それは保護者にとっても同様である。そのため、子どもの気持ちや興味・関心に寄り添い、子どものペースに合わせて

関わることは、保護者にも安心感を与えることだったであろう。

さらに、A子が安心できるキーワードは「お母さん」だったようである。そのため、遊びに誘ったり展開したりする際は、どこかで母親とのつながりを感じられるようにすることを教師は考えている。遊びはA子のペースに合わせ、気持ちが落ち着き遊びたい気持ちになった時を見て言葉をかけ、一緒に遊びを見つけていっている。特にネックレス作りでは、作品を通して母親と繋がることを感じられたのであろう、集中して遊び、満足する姿が見られており、子どもと教師の関係が出来てきていることがうかがえる。

【事例②：クラスの仲間と】

5月頃までは部屋で過ごすことが多かったA子。最近は砂場遊びに魅力を感じるようで、外遊びによく出かけるようになる。砂場では、砂を握ったり指を広げた時に落ちたりする感覚を楽しんだり、カップに砂を入れたり出したりする遊びを繰り返したり、貝殻や石集めをしたりと、自分から遊びようとする姿が見られるようになる。まだまだ表情は硬いが、教師を待っている姿も見られるようになった。

それでもA子には、まだ母親と離れるのがつらい時がある。朝、母親と離れるのがつらく涙を見せている時にはB男が「はい、どうぞ」とティッシュを持ってくる。給食の時に寂しい気分になっているとC子が「大丈夫だよ、お迎え来るからね」と優しく言葉をかける。

給食前には、母親からの手紙を読み、それをポケットに入れてお守りにしている。しかし、まだ自分から一口食べるというまでには至らない。そんな時は隣でD男が「しっかり食べようよ」と言わんばかりに食事をし、励まそうとしている。クラスの友達から応援されながら、1日を頑張れるようになっていく。

6月29日は雨だった。外遊びに行けないことや、教師が1対1で関わる時間が少なかったこともあってか、普段よりも不機嫌な表情を見せる。教師はA子の不機嫌な表情を読み取ることは出来るのだが、A子はまだ気持ちをうまく言葉にして伝えることが出来ないため、思いを読み取ることは難しい。

この頃になると、A子の中に少しずつ遊びたいと

いう気持ちが出てきていることが感じられる。しかし言葉によってそのような姿を認めようとするA子が縮こまってしまうと教師は感じており、そっと寄り添い一緒に遊びを楽しもうとすることを心がけていたようだ。そうすることでA子が教師に安心感を抱くようであり、教師はできるだけ1対1での関わりを大切にしている。そして、まだ言葉で思いを伝えられない分、表情をよく見てA子の気持ちを読み取ろうとしていることも分かる。言葉をかける時もA子が「うん」「ううん」で答えられるようにし、思いを理解しようとしていたようだ。なかなか自分の言葉で思いを伝えられないA子であるから、辛い時や悲しい時になるとさらに言いづらい様子を見せており、教師はA子の姿を受け止め、教えてくれるのを待つように気を配っていた。その際は、A子への思いを伝えられるように、心の中にある思いにいつでも耳を傾けていくことを大切にし、信頼関係を深めていこうとしていた。A子には教師に見守られているという安心感があったからこそ、少しずつ行動範囲が広げられ、気に入った遊びを見つけ気が済むまで遊び込もうとすることが出来たのであろう。

給食の時間では、エプロンやコップの準備を自分で行い席に着くことが出来ていたのも、食べたい気持ちはあったようだが、上手くいかなかった。そのため、教師は何かきっかけになるものを用いることで、母親と相談して手紙を読むことを取り入れたが、不安な様子も見られていた。そこで教師はA子が「食べたいな」と思うことを大切にし、給食の時間が少しでも楽しい時間となるように母親からの手紙を読む時間に重点を置き、A子のペースに合わせて関わることにしていた。ここでも、子どものありのままの姿を受け止め、見守り、支えることが重要であることが感じられる。

この頃になるとA子のことが気になるクラスの友達が出来てきて、彼らがそれぞれの形で励まそうとしてきている。クラスの友達も教師と同じように温かい気持ちで受け止めようとしていることが分かる。教師もクラスの子どもの姿からそのことを感じており、クラス皆がA子と関わっており友達とそばにいることを感じられるようにA子と関わろうとしていたようだ。クラスの友達と嬉しそうにしている時には、「ありがとう」や「A子ちゃん、嬉し

いね」など、友達の姿を認めてクラスが安心できる場所になるように関わろうとしていた。ここから、教師は無理に友達関係を繋げようとせず、まずは一人ひとりを認め、友達への興味・関心が向くように場を設定したり、言葉をかけたりしていくことが大切である¹⁰⁾ということが分かる。こういった対応が、子どもが友達との関係を広げていくきっかけとなるのであろう。

(2) 友達との関わりの中で

【事例③：C子と遊びたいけれど】

6月、幼稚園での生活に慣れてきたE子、このところ友達とのトラブルが増えた。友達との関わりは積極的に取ろうとしているのだが、自分の思いがうまく伝わらないと手を出してしまう時がある。

C子のことが気になるようで、何でもC子と一緒にしたい気持ちが出てきたE子であるが、その思いが伝わらないと、「何で？」という気持ちが叩くという行為に表れてしまう。その時教師は、C子を好きで触りたい、関わりたいというE子の思いに寄り添い、C子の肩を一緒にトントンして、「ねえ、触ってもいい？」とやって見せると、E子も同じように「触ってもいい？」と聞くことが出来た。それを受けてC子も「いいよ」と返事をしたので、E子の表情も明るくなった。

言葉でやり取りすることを伝ええると、少しずつできるようになってきたが、まだ手が出てしまうこともある。そういう時には、その都度友達の表情を見たり、友達はどういう気持ちになるかをゆっくり話したり、誘い方を一緒にやってみたりすることで、気づくことは出来る。上手くやり取りができると、「今日はお友達と仲良くできたよ」とニコニコ話をしに来る。

幼稚園の生活にも慣れ、気になる友達との関わりを積極的に持とうとするE子だが、相手に思いが伝わらないことも多く、自分の思いがうまく伝わらないと手を出してしまっている。子どもは、自分がしたいことや自分の思うことが通らない時、それが相手のせいだと思うとその相手に対して怒りが生まれ、自分の気持ちを制御できなければ言葉や行動で攻撃を加えることになる¹¹⁾。まだE子には自分の思い通りにならない時の怒りが制御できないのか、手

が出てしまっている。そこで教師は、まずは子どもの思いに寄り添い、共感的な関わりを試みようとしている。そして、言葉だけでは理解が難しいのかもしれないと考え、気持ちを伝える方法をやってみせている。子どもは、教師の言動をモデルとして学ぶことも多いので、伝え方の分からない子どもに1つのモデルを示すことは有効であろう。実際、教師を真似て自分の思いを言葉で伝えられた時には嬉しそうな表情を見せているので、気持ちを言葉で伝えることの大切さには気づいているように思う。

しかし、上手くできたという成功体験をすぐに忘れてしまうのか、言葉でのやり取りが続かない時も見られるので、時間をかけて友達とのかかわり方や自分の気持ちの伝え方に気づけるように支援する必要がある。「言葉で伝えることが出来ると気持ちがよい」と思える体験の積み重ねによって少しずつ変化が見られるのではないかな。

【事例④：ダンゴムシの絵】

9月になると、A子は涙を見せずに母親と離れられる朝が増えてきた。気持ちが落ち着くと塗り絵をしたり絵を描いたりして遊ぶ。A子がダンゴムシの絵にカラフルな色を塗っていると、外からF子が帰ってくる。A子の様子を見ていて自分も描きたくなったようで、ダンゴムシの模型を触りながら「足はどうかかな？」などと真剣な表情で描いていく。さらにそれを見ていたE子も、「私もまだ描いてない」と言う。クレヨンを使ってカラフルな家族ダンゴムシを描いていく。

2学期になり、少しずつではあるがA子も幼稚園での遊びが楽しくなっていた。その様子から、教師は朝の受け入れを1学期よりも短くし、気持ちの切り替えを促すようにしながら1日の始まりを迎えることを心がけていくことにする。そのために、子どもの好きなことを理解し、コーナーを充実させる。A子は絵を描くことが好きなようなので、塗り絵コーナーを用意するなど、子どもの姿に寄り添いながら対応している。

また、10月に作品展を控え、制作活動への取り組みも必要となってきた時期でもあった。作品展に向けて年少団ではダンゴムシの絵を描いていたが、こういった活動は教師と一緒に1対1で取り組むこと

が子どもの安心感に繋がると考え、少人数でやりたい気持ちになった時に取り組むように心がけている。実際、A子も教師と1対1で取り組むことで安心につながり、描き始めるとどんどん筆が進むことになる。1対1で関わることにより、A子の思いに寄り添うことが出来、前に進めるようになったと思われる。子どもたちの出来ることが少しずつでも増えていくためには、教師が安心できる環境を子どもに合わせて設定していくことが必要であろう。

この事例では、友達に次々と感化されていく姿も見られる。楽しそうにダンゴムシを描いているA子を見て、F子がダンゴムシを描きたくなっている。それまでF子は「ダンゴムシは格好よくない」「カブトムシのほうがいい」「関係ない」などと言って描きたがらなかった。絵を描くことが嫌いというわけではないようだが、子どもの心の中に意地のようなものがあつたのかもしれない。それが、A子のクレヨン好きな色を選んでカラフルなダンゴムシを描いている姿を見ることで、「カラフルなダンゴムシを描こう」という刺激になったのではない。さらに、F子がカラフルなダンゴムシの家族を描いている様子に刺激を受け、E子も「まだ描いていないので自分も描きたい」という気持ちに繋がっていったのであろう。楽しそうな絵、楽しそうにA子がしている姿が重なってこそ、2人のやる気が起こったのだと思う。友達と関わる中で、友達の力やよさを感じる経験である。このような遊びの中でよさが生かされていくと、友達と一緒に活動する楽しさが増え、子どもの生活がより豊かになっていくことであろう。

【事例⑤：しっぽ取り】

11月になり、鬼ごっこ、あぶくたつたなどの簡単なルールのある遊びを楽しんだ子どもたちは、しっぽ取りにも興味を示すようになる。年長児が遊んでいるようなルールではまだ難しいので、しっぽを付けた子どもたちを、しっぽをつけていない子どもたちが追いかけるルールで遊ぶ。

G男がしっぽを付ける番になり、しっぽを付けてスタートする。追いかける子どもたちは、必死になってG男を追いかける。追いつかれそうになるとG男は、「バリア、バリア」としっぽを守

ろうとする。鬼ごっこで学んだ知識をしっぽ取りにも使おうとしていたようだが、「しっぽ取りにはバリアは使えないよ」と言われ悔しさから涙が出る。

F子、H子、I子と教師の4人でしっぽ取りをしようということになった時、教師が追いかける側で遊んでいたところ途中で抜けなければならなくなった。そのため3人でしっぽ取りを再開していたが、F子がI子のしっぽを取ったところ、I子が取られたことに腹を立てたことでF子とI子が言い争いを始める。

ルールのある遊びを行う中で、「取られたくない」「勝ちたい」という気持ちが芽生え始めている。G男にしてもI子にしても、負けることが悔しかったのだろう。子どもたちは友達との遊びの中で、相手のことを意識し始め、負ける悔しさを味わっている。子どもたちは皆、しっぽ取りではしっぽは取られるものだというルールは頭ではわかっているが、本気で遊んでいるからこそそういう悔しさを感じるのではないだろうか。そうは言っても、他者と共に遊ぶということは、自他に共有された何らかのルールに従うことである、ルールを守らない子どもがいると楽しい遊びにならず、その遊びは継続しない¹²⁾。そのため、子どもたちは友達と一緒に楽しく遊ぶためにルールに従うことが必要であることを理解していく。その過程でいろいろな感情に出会い、その度トラブルになったり葛藤したりするのだろう。この時期の子どもたちへの支援として、子どもたちと皆で楽しく遊ぶためにはどうすればよいのかと振り返り考える時間を設け、いろいろな思いを経験できるようにする必要があるのではないか。

また、子どもたちには今までの遊びの知識を取り入れて使おうとする柔軟性がある。鬼ごっこで「バリア」と言うと捕まりそうになっても逃れられるという子どもたちの中でのルールを取り入れようとする応用力が感じられる。今回はそのルールは使えないということで悔しい思いをしたが、子どもたちの遊びはいろいろなところで繋がっている。

【事例⑥：異年齢の友達と】

12月になると、A子の表情もほぐれてきた。

給食も補助の先生のそばではなくても食べられるようになった。

18日のなかよし弁当の日は、年長のJ子、年中のK子とペアになる。手をつなぎたい、仲良くなりたいという思いはあるようだが、なかなか一歩が踏み出せない。弁当の時間はJ子、K子と一緒に空間を楽しんで終える。その後の外遊びで、2人が迎えに来てくれるが恥ずかしくて行けない。そこで教師がA子の手を引いて2人との所に行き「私も入れて」とA子の気持ちを代弁すると、2人と手をつないで移動したり2人の近くで雲梯や滑り台を楽しんだりする。この日をきっかけにK子と仲良くなり、次の日も一緒に追いかけてこをしたりすれ違うと手を振ったりしている。

年が明け初詣の日、年長のJ子と手をつなぎたいが恥ずかしくて出来ないという様子を見せる。教師がA子の手をJ子の手にそっと近づけると、恥ずかしながらも手をつなぐことが出来た。神社から帰る時は、J子が手を差し伸べると自分から手をつなぐ姿になり、また一歩踏み出した。

この頃、L子がA子のことを好きになり、積極的に関わりを持ち続ける。そのうちA子もL子のが嬉しい存在になってくる。外遊びから帰ってくる時に2人で手をつないでいたり、園庭開放で一緒に遊んだりしている。A子は「L子ちゃんと結婚したい」というほど大好きな存在になり、L子もA子と仲良くなれたことが嬉しそうだ。

友達もでき、給食も自分のペースで少しずつ口に運ぶことが出来るようになってきた。パンの日には自分の手で持って食べる姿もあった。自分の気持ちを言葉にすることとはまだ難しいようだが、表情や姿で伝えられるようになった。

この頃になると、A子も友達と一緒に空間を楽しめるようになっており、成長が感じられる。食べたい気持ちはあっても食べるきっかけを見出せずに次になかなか進めなかったが、きっかけをつかむと食べられるようになっていった。教師はそれまでにA子に寄り添うだけでなく、次へのステップとなる言葉かけやきっかけを作る関わりなども大切にしていた。子どもの力を信じ、少しずつ自分で食べたいように顔の見える場所で見守るなども行っている。仲よしペアでの関わりの時も、A子の表情から

J子やK子と一緒に食べたいけれどもなかなか行動に移せないということを読み取り、背中を押せるようにと年長児のところに一緒に行くという関わりをしている。教師と一緒にならA子が一歩踏み出す勇気に繋がってくれるのではないかという思いもあり、気持ちを伝えるきっかけを作っている。そのことがきっかけとなり、異年齢の友達と関わる事が出来、安心して遊ぶ相手が広がっていている。

しかし、時が経つにつれA子の思いを実現できるように、モデルを示すことに視点を置かず、内面を汲み取り本当はどうしたいのかを探っていこうとしている。いろいろな関わりから、少し強引さがあったほうがA子には後押しとなっていることを感じている。そのためL子のように積極的に素直に遊びたいという思いを伝え寄ってくる友達がA子の心を動かすので、L子が心を許せる存在となっていくことを望みながら、初めてのことは教師がきっかけを作りながら見守っていく支援を行っている。子どもの変化を大切に認め、自信を深め次に繋がるような支援が必要であることが分かる。そのような支援によって子どもは出来るようになっていいたいと思い、毎日コツコツと取り組む姿も見られるようになる。

【事例⑦：1番になりたい】

3学期が始まり、久しぶりの朝の集い。教師が十二支の動物を紹介していると、E子とM男が、どちらが早く答えられるかでもめ始める。教師が「皆で考えて、皆で答えてほしい」と伝える。M男は理解し友達の答えを待つが、E子は1番に答えたいという気持ちが抑えられず、誰よりも早く答えようとする。

久しぶりに跳び箱を用意すると、誰よりも早く跳び箱を飛びたくなったE子が、順番を待ちきれず「1番にする」と割り込んでくる。

戸外遊び後に部屋に帰ってくる時や朝の支度時などで「〇〇ちゃん、早かったね」という教師の声を聞くと、E子はその友達に手が出そうになる。片付けの時、C子が早く1番になれなかった。するとE子がC子に手を出そうとする。教師はE子の1番になれなかった悔しさやもどかしさを受け止め、C子にE子の気持ちを代弁すると、C子は「うんうん」と頷く。E子の悔しい気持ちがC子に伝わると、E子の気持ちも晴れてきた。

1月になり、多くの子どもたちの中に「1番になりたい」という意識が芽生えてきている。ゲームなどを経験し、勝つことの嬉しさを経験したり、「誰が1番早いかな？」などの教師の言葉を聞いたりする中で、「1番」という意識が生じてきているのだろう。

どの子どもにも「1番になりたい」という思いはあるはずだが、その表現の仕方はそれぞれである。1番になれたりなれなかったりする中で、悔しい気持ちを抑えて次につなげようとするのを覚えていくが、E子のようにまだ自分の気持ちと折り合いがつけられない子どももいる。3歳児は、「自分が大好きで自分が1番」な時期であるから、教師に見てほしいし「1番だね」と認めてほしい。教師がそういった子どもの気持ちを受け止めると子どもは自分の気持ちを抑えることが出来るようになっていくので、教師にはそのような気持ちを受け止めつつ友達の存在も受け入れられるように対応することが求められる。

4. まとめ

子どもたちが人と関わる力を育み、幼稚園において人間関係を広げていくためには、まずは教師との信頼関係を築くことが重要である。教師が子どものありのままの姿を受け止め、見守り、支えていくことで、子どもは守られているという安心感を得られ、教師との信頼関係が生まれていく。教師との信頼関係を構築するにあたっては、子どもだけでなく保護者との関係も重視し、教師と保護者の間にも信頼関係があることに子どもが気づくと、さらに子どもと教師の信頼関係は強くなるだろう。

子どもと教師との間に信頼関係が築かれると、子どもはそれを基礎として友達への興味・関心が広がり、関わろうとするようになる。関わりが生まれてくると幼児は自分を出すようになり、時にはぶつかり合いを経験する。ぶつかり合う中で様々な感情を体験し、相手の存在や自分の思い、考えが分かるようになり、相手と自分の間には思いの異なることがあることに気づいていく。子どもにとっては非常にもどかしいことではあるが、その体験は自分の気持ちをコントロールする力へと繋がる。そして、相手

の気持ちを押し量ったり思いやったりする力へと繋がっていく。

3歳児においては、まずは教師との信頼関係を築き、子どもにとって幼稚園や教師は安心できる存在、楽しい存在となることが重要である。そのような関係の中で、子どもたちは友達と一緒にいる雰囲気を楽しめるような配慮を考えていく。そういった支援が求められているだろう。そのためには、子どもの話に関心を寄せ、話したくなる雰囲気を作っていくことが重要である。教師は、温かいまなざしをもって、子どもの言葉や表情に関心を寄せて寄り添い、事実のうちに潜む「内実」をも受け止めていけるように意識していく必要があるだろう。

もちろん、A子のように新しい環境に不安を抱き、時間がかかる子どももいるが、安心できる言葉かけや教師が常にそばにいるということを感じられるような関わりをし、思いを受け止めていくことや、子どものペースに合わせる支援などにより、少しずつ子どもが素直な気持ちを表現できるような雰囲気を作っていくことが必要であると考えられる。

今後は、様々な子どもの人間関係の広がりとして、4歳児や5歳児の人間関係の広がりや教師の支援についても検討していきたい。

謝 辞

観察させていただきました幼稚園の先生方と園児の皆様にご心から感謝いたします。

註

- 1) 寺見陽子 (2001)『こころを育てる人間関係』保育出版社, p.35
- 2) 塚本美知子 (2018)『対話的・深い学びの保育内容 人間関係』萌文書林, p.65
- 3) 同上書, p.64
- 4) 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』フレーベル館, p.3
- 5) 文部科学省 (2018)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, p.33
- 6) 同上
- 7) 同上書, p.34

- 8) 高月教恵・松岡知子 (2006) 「子どもの人間関係の育ちと教師の関わる方についての一考察 ― 入園当初の3歳児を中心に―」『新見公立短期大学紀要』27, pp.127-135
- 9) 同上
- 10) 前掲2), p.67
- 11) 同上書, p.124
- 12) 前掲5), p.179